

[遺族] 河本 恭輔 氏(平成 27 年(当時 20 歳)、姉を交通事故で失う)

[要旨]

## ○当時の状況

今からお話しさせていただくことは、僕個人の意見であり、交通事故で家族を亡くされたすべての方に共通するとは限らないことを、ご理解くださいますようお願いいたします。

2015 年 5 月 11 日、大阪のアメリカ村で、姉が飲酒運転の車にはねられ亡くなりました。事故当時、加害者は駐車場から出るところで、一時停止を怠り、且つ一方通行を逆走して、自転車に乗っていた姉に当たりました。

事故直後から数日の記憶は断片的にしか残っていません。すぐに現実を受け止めることはできませんでした。事故当時の姉の顔、亡くなった後に家に帰ってきた時の姉の顔、葬式の時の姉の顔など、姉を目の当たりにした時の記憶がほとんどです。

当時の感情としては、言語化するのが難しいですが、喪失感を感じたり、何事においても興味を持たなくなったり、無気力になったりしていたと思います。とにかく、何もしたくなかったです。

## ○事故をきっかけに一変した生活

事故をきっかけに、僕(当時 20 歳)の生活は変わりました。特につらかったのは、人に見られているという感覚が常にあったことです。ニュースで顔を出していたことや、署名活動をしていたことから、大学はもちろん外を歩くだけで、顔を指されるようになりました。見られているという被害妄想も、恐らくあったと思います。

常に人に見られているということがとても怖く、マスクを常にするようになり、今まで被らなかった帽子を被り、できるだけ人目につかないように生活していました。それもだんだんできなくなり、次第に家から出なくなり、家を出たとしても人目につかない場所に行っていました。いずれ大学に行けなくなり、留年をし、最終的には中退しました。

ずっとこのままではいけないということは理解しているけれども、その状況を打破する気力がないことも含めて、つらかったです。

## ○意見の相違が言えないつらさ、自分の感情をすり合わせるつらさ

姉の死や裁判のことなどで、親や周りの人と意見の相違があった時、それに対し、何も言えなかったこともつらかったです。

一番注目を浴び、意見を言い、その意見に耳を傾けられるのは、間違いなく親です。親の意見を聞いた上で、息子である僕にどう思うかを聞かれた時、自分はそうは思っていないと聞いても言えませんでした。なぜなら、同じ意見であるべきだと思っていたからです。遺された僕達が、異なる意見を持つべきではない

と思っていたからです。そのような感情のすり合わせも、僕にとってはつらかったです。

一番つらいのは親だと思っていましたし、僕が悲しんだり泣いたりしている場合ではないと思っていました。当時、母と2人で暮らしていたので、「支えるべき、冷静であるべきなのは僕だ」という使命感も、恐らくあったと思います。

## ○自分の思いに忠実に生きる

このような認識が変わったのは、きょうだいの会に参加し、同じように兄弟姉妹を亡くした方と話をした時からです。意見の相違があっても何も言えなかった僕でしたが、その会に参加して話を聞いた時に、意見の相違があるのはごく普通のことだと教えていただきました。僕と共通の悩みを持っている人にも出会い、思いを共有することもできました。そこから、自分の思いに忠実に生きるという選択肢が、僕の中で生まれました。

今、当時通っていた大学は辞めてしまいましたが、姉が看護師として働いていたこと、正看護師を目指して働いていたことから、僕が代わりに正看護師として働きたいという思いを持つことができ、前に進むことができます。

家族を亡くされた方にお伝えしたいことは、自分と同じ考えを持つ人は必ずいるということ、そして、自分が他人と違う考えを持つのは普通だということです。